星と霧

夢遊星人

ファンタスティク・ストーリーズ

星と霧

夢遊星人　作

　彼は歩き始めた。妙に静かな町だった。彼の下り立った所から、幅広い通りが、前後左右どちらを見渡しても果てしなく続いていた。灰色の建物、皆一様にどこか似たところのある鉄骨のビルディングが、同じく無限の彼方にまで連なっていた。すべてがいやに静かだった。どこかの小都会の早朝を思わせて、それは一見一日のもろもろの騒動の予感をはらむかのようだった。しかし歩くにつれ、彼の最初からの奇妙な感じはいよいよ深まっていった。はるかに眼をやっても、彼の視線をとらえるようないかなる障害物も、道路上に現われなかった。道路というものが連想させる人と車とのあの絶え間ない動き、絶え間ない騒音というものが、すっかり消え去っていた。それのみか、そうした運動が安らいでいるという感じを起こさせる、微小な振動さえなかった。すべてがあまりにも静かで、あまりにも清潔すぎた。この清潔という感じは、同時に彼に理由のない不安を起こさせた。
――まだ朝早いのだから。それに、このあたりは駐車禁止にちがいない。そうにちがいない・・・。
　彼はその波のように押し寄せてくる不安を、押しもどすように呟いた。しかし、いつの間にか彼の歩調は早まっていた。
――確かに、人は一人もいないようだ。それにしても、妙に見なれない気のする町だ。こんな所へどうして自分は来てしまったのか。
　彼は腕時計を見たかった。しかし、いつの間にか失われていた。どこで失くしたのかも思い出せなかった。この町の四辻に突然下り立った瞬間以前の記憶が、曖昧模糊として、明確につながらないのである。どこか霧のかかった山道を歩いていたような気がする。そして誰か不思議な人物と話していたような。しかし、いつの間にか霧をぬけて、この見知らぬ町に立っている自分に気づいたのである。その人物は鮮やかに記憶に甦った。白い顎鬚と白い頭髪、やはり白いどこか異国の衣裳をまとった、普通の老人ではなく、仙人めいた感じのする人物だった。老人は何かを語り、彼は何事かを答えた気がする。しかし、そのイメージの前後は霧の中に包まれていて、それだけが宙に浮いていた。時に彼は、自分が二重の人生を生きているような気がすることがある。全く前後がつながらない、不思議な記憶が甦るのである。この場合も、彼は同じような、あっ

たはずのない出来事の、記憶のもどかしさに打たれていた。
　どこまで歩いても、左右の建物は変わりばえがしなかった。コンクリートの町――そう彼は呟いた。人工という観念を極限にまで露わにした、むきだしの冷たさがあった。早朝にしてはシャッターが下りていない。生気のない目のような窓や扉が、人の気配を感じさせないだけに、かえって不気味さをかもしている。なかにはその硝子さえ失われて、何一つ物のない空洞がぽっかりと、照明のない空間をのぞかせている。どの建物も、内部は空洞らしかった。
　歩くうちに、彼のいわれのない不安は静まってきた。いわれのないと言うのは、彼の不安は、どうやら無人であるらしいこの町そのものよりも、町というものにつきものの人の気配を感じ、恐れることにあったからだ。無人であることが確信できるにつれて、彼の不安はおさまり、かえって穏やかな、メランコリックな安堵に移っていった。

　彼はふと我に返ったようにあることに気づいた。これらのむきだしのコンクリートの建物は、見知らぬ異様な感じをあたえはしたが、何か本能のようなものが彼の歩みをある方向へと向けている。思えば彼が幾度も通ったことのある道なのである。彼は漠然とした感じではあったが、家へ帰ろうとしているのである。彼はあらためて大通りに並ぶ、無骨な建物の群を見まわした。そしてこれらの色彩のない一様な建物が、本来持っているあらゆる虚飾を剥ぎとられた後の姿であることに、ようやく気づいた。言ってみれば廃墟なのであった。しかし古代の歴史から立ち現われてくる、亡霊めいた崩壊の跡ではなく、たった今存在していたものが、一瞬にしてあらゆる生活の痕跡を奪い去られたとでもいった、あるいは生命の生まれる以前の無機物に帰ったとでもいった、清潔な廃墟であった。
　そして彼は、自分が家に帰ろうとしていることの滑稽さを思った。確かにこの大通りの遥か先には、かつての故郷といえるものが見つかるかもしれない。彼の育った家すらあるかもしれない。しかし同じ無人の廃墟であることは予想できた。そして故郷を思うと同時に、彼はある種の憂鬱にとらわれた。それはノスタルジアではなく、常に彼を圧迫していたものが、無慈悲にもこの世から消し去られたことの安堵と共に生じた、生ぬるい喜びの混じったメランコリーだった。彼はふと思いついて、かつての商店街であった大通りをあと戻りした。確かにここには本屋があり、そこにはレコード屋があったはずだ。それららしき建物に入ってみた。シャッターはどれも開いている。外の明りが届く範囲での薄明かりの中には、ただ空洞が広がっていた。その空間の配置から本屋であることがおぼろに思い出された。そしてそこでの憂鬱な思い出も。参考書を買う金がなく、同じ書棚で何度も立ち読みしている彼を、邪険な若い店員がわざとはたきで回りを叩いたりした。彼は顔を赤くして、それでも自分のことではないように立ち読みを続けた。その店員ももういない。自分を苦しめるものはこの世から消えてなくなる、いつからか彼はそう信じるようになっていた。
　隣のレコード店であった建物にも彼は入ったみた。むき出しのモルタルの壁の間に立って、彼は無数のレコードや楽譜を想像してみた。そして返品に行ったレコードのことを思い出した。なぜか大きな傷がついていて、それを言うと、むっとした顔の店員は、黙ってつき返した。こちらがつけたと言わんばかりであったが、彼にはそれ以上言い返す勇気がなく、顔を赤らめて店を

出た。この店もあの店員も、もはやこの世から消えた。彼はさらに戻って、デパートであった大きな建物の前に立った。そこの洋品店で何度か買い物をしたことがある。衣類に関しては、彼はたいてい失敗している。色も大きさも、彼はまるで衣服というもののセンスが分からないのだ。だから店員の言うままに買ってしまい、サイズが合わなかったり、地味すぎたり、また逆に学生には立派過ぎたりした。セーター一つでさえ、バーゲン品を手にとったり置いたりをくり返すので、ある時コーナーにいる店員が恐い顔で睨みつけているのに気づいた。彼は手にしたセーターをそっと置き、顔を赤らめて店を出た。その万引きを疑った店員ももういない。そればかりか、この世から衣料品店などというものがなくなり、彼の悩みの一つも消え去ったのだ。

彼はデパートの階段を上がって屋上に出た。家族連れで賑わった遊技場は、だだっ広いコンクリートの平面に変わっている。子供たちの歓声は、彼には不協和音でしかなかった。そんな中でたまに一人で紛れ込むと、大人たちから妙な目で見られた。彼はただ空と街並みを眺望したかっただけなのだが。そうした邪魔者もすべて消え去った。彼は手すり越しに街を見下ろし、空を見上げた。青空には午前の太陽が燃えていた。天体こそが彼の友であった。遥か彼方に燃える光の球は、子供の頃から彼の心を暖めてきた。それがこの地上とは比較にならないほど遠くにあることを、彼は本能的に知っていた。それがこの地上での苦悩を、ちっぽけな、取るに足りない出来事に思わせもした。彼は何とははっきり知れない希望で、胸をふくらませたものだった。今も太陽は、この無人の町で彼の唯一の友だった。

見渡す街並みは、ただコンクリートの形骸だけを残す荒寥とした眺めだった。その果てに茶色の大地が広がっていた。彼はよく出かけていった公園のある辺りの見当をつけてみたが、何一つ緑は見いだせなかった。白く光っている池が、その在りかであるらしかった。彼は再び階段を下りて、街路に立った。少し躊躇してから、最初に歩き出した方向へと道をもどりだした。しばらく行くと、コンクリートのビルディングに隙間が出来るようになり、茶色の土が目立つようになった。広場の中にある平たい建物に彼の目がとまった。記憶に間違いがなければ、それは彼の通った幼稚園であった。それは彼にとっての最初の地獄であった。

広場を走り回る園児たちの動物めいた叫喚がよみがえってきた。わけの分からない生きものがわけも分からず叫びながら走り回っている中で、一人だけぽつねんと、動きもせず、にこりともせず立ちすくんでいる彼を、園児たちは気味悪そうに避けて通った。女の子たちは、時々彼の存在に気づくと、宇宙人みたい、と囁きあった。だが彼の方こそ、周りの園児がすべて宇宙人に思われたのだ。幼稚園の二年間を、彼は一言も喋らずに過ごした。ある時初老の男性の園長が、何を思ったか彼に話しかけ、紫に輝くコガネムシをくれた。彼はその光沢に不思議な魅惑を覚えたが、やはり言葉が出なかった。またある時、一人の女の子が、突然ぼんやり立っている彼をおんぶして、部屋の中を走り出した。彼は愕きと羞恥とで体を固くした。女の子は部屋の端まで走ると彼を降ろして、また別の遊びに走っていった。彼は背の上で、まるで誘拐でもされるように頭をそらせていたが、そのささやかな出来事はいつまでも忘れられずにいた。そして少女の家の前をそっと通ったりした。

その少女の家は、もはやどこにあるとも知れない。彼は沈んだ気持で歩き続けた。コンクリートのビルはまばらになっていく。そしてまたひときわ大きな方形の建物が荒寥とした大地にとり

残されている。彼はそれが彼の通った小学校であることを予感した。そしてその先には中学校の建物のあることも。小学校はさらにひどい地獄であった。彼は机と椅子というものを与えられ、一日中それに座りとおした。腹痛がしても、トイレに行けず我慢した。喋らない彼を、年とった女教師は何とか喋らせようとしたが、彼には拷問のように苦痛だった。彼が初めて喋るようになったのは、学校にも彼と同じように迫害されている宇宙人がいることを知った時からである。その乞食の子のような少年は、休み時間になると学校中の皆から追いかけまわされ、あげくは二階から樋を伝って地面まで逃げていった。彼はその姿を見て、妙に同情を覚えた。彼の姿が見えないと、一体どこに隠れているのだろうと気がかりになり、階段の下などを探したりした。そしていつの間にか、学校帰りに仲良しになり、何の緊張もなく喋っているおのれに気づいたのである。

その乞食の子を家に誘った時、母親は彼を激しくしかった。やっと友達を作ったかと思うと、乞食の子なんて。家では、彼は兄弟の中でも一番下であったから、静かにしていた。彼が子供のわりに、能面のように表情がないのを、両親も、兄弟も憎んだ。彼が家庭でも小さくなっていたのは、幼児期の体験が脳裏に染みついていたからだ。彼はなぜか両親に嫌われていた。赤子の頃、長く寝かされたままほっておかれたので、自分から這い回ることを覚え、時には縁から転げ落ちて、土の上で泣いていた。誰もかまい手がないので、彼は這うことに快感を覚えて、歩けるようになってもまだ這っていた。そんな彼を母親は恐い眼で見た。父親に関しては、たった一度の恐怖体験が幼少年期のすべてだった。生まれて初めてズボンをはかされ庭に出た時のことだった。庭で何かの仕事をしている大人がいた。それが父親であることに気づいて、彼はなぜか嬉しくなり、手を叩いて笑った。それに気づいた父親はものすごく恐い顔をして、彼の方へつかみかかってきた。彼はとっさに本能的に逃げた。家の陰に泣きながら逃げた彼を、父親はそれ以上追いかけようとはしなかったが、それ以来彼は父親が近づいてくると、自然に身震いが起こった・・・。

乞食の子はいつの間にか小学校からいなくなった。行きや帰りに一緒になることが多かったので、彼は寂しい思いをした。ある時生まれて初めて食べたカレーライスが美味しかったと、いかにも嬉しそうに話すのを聞いて、自分はまだ普通に食事ができるだけましなのだと思った。それからカレーを食べるたびに彼のことを思い出した。彼は再び喋らない子になった。一人二人友達ができても、相手の方からつまらなそうに離れていった。中学に入っても、彼は全く目立たない少年だった。中学校はすぐさきに、無骨なコンクリートの廃墟を残していた。運動場であった場所に立つと、校舎は休日のように静まり返っている。記憶にある玄関に入ってみると、何もない空洞が広がっている。教室を覗いてみると、机や椅子すらない、単なる空間が思い出さえ呑みこんでいる。ただ一つの思い出を除いて。彼は生まれて初めて級友たちから殴られたのである。一度だけ掃除当番をさぼって、皆からとりまかれ、何度も殴られた。いつも目立たない彼が、何か目立つことをすると、てきめん皆の反撥を受けるようだった。

中学校の先には、彼のもとの家があるはずだった。そちらへ歩み始めた彼の足はふとためらって、その方向を避けるように、四つ角を曲った。何もないままに、忘却に委ねよう。彼の足は公園へ向かっていた。そしてその道は高校へと、ローカル電車の駅まで通った道だった。希望は

高校へと向かった。しかし、何という更なる地獄が待ちかまえていたことか。彼は生まれて始めて坊主頭になった。そして囚人のように、田畑の真ん中にある寒ざむとした校舎に、終日机と椅子に縛り付けられていた。新しいクラスメイトの間では、彼は幼少年期のように、再び喋らなくなった。あえて喋ろうとすると、突拍子もないことを口走るようになり、周りから異様な目で見られた。それに気づいて、彼はなおさら沈黙するようになった。それでも彼は従順な囚人のように、毎日遅刻するのを恐れながら（遅刻すると校門に立たされたのだ）、この獄屋に通った。希望は早く大学へ行くことだったが、彼の始終重苦しい頭は、学習についていけなかった。家への遠慮から、彼は金のかからない国立大学を目ざさねばならなかった。

線路が廃線のように延びて、その先に駅らしいホームがある。二度と電車が通ることはないであろう。乗り遅れそうになって、線路を走り、ホームからよじ登って乗ろうとして、駅員からしかられたことがある。それ程までして遅刻を恐れたのか。その駅員も、そしてそれほど恐れた高校も、もはや無い。彼はメランコリックな安堵の思い出にふけりながら、線路を越した。果てしない荒寥の中に、いくつかの建物の姿が立つ。大学へ入ってからは、彼はよく一人で緑の公園へやってきて、松林の中や、池のほとりを散策した。奇蹟のように最後の踏ん張りで、彼は曲がりなりにも、国立と名のつく大学へ入っていた。その後の茫然とした無気力感の中で、大学生活もまた無意味であることが分かってきた。結局彼は、どこにも身をおく場所のない存在であったのだ。そしてその後に来る、社会というものの中でのおのれの身を考えると、絶望感にとらわれた。

コンクリートの大きな四角い枠が見えてきた。そこには水がたたえられていて、少年時代に何度か来たプールであることが判った。彼はプール際にのぼってみた。小学生には少し深すぎて、彼は一度溺れかけたことがある。水を恐れる彼に、兄弟は立ち泳ぎなるものを教え、水の中に入らせた。たちまちドブンと沈んでしまい、いくら言われたとおりに手足をバタバタさせても無駄だった。苦しまぎれに、そばにいた誰かにしがみついた。驚いたその人は、もぎ離そうとしたが、気がついて引き上げ、なんだ、溺れてるのかと言った。その時の恐怖から、彼は泳ぎが苦手になった。彼は静まり返った青い水を見ているうちに、急に泳いでみたい気になった。太陽は中天からじりじりと照りつけていた。何か乾きのようなものを皮膚に感じた。彼はその場で衣服をすべて脱いだ。全裸でプールのへりに立ってみると、滑稽なような、しかし誰にも笑われることのない開放感を覚えた。彼は足から静かに水の中に入った。背の伸びた今では、かつてのような恐怖感はなかった。　彼はただ一つ知っている平泳ぎを試してみた。すると不思議なほど、体は軽がると水の中を進んだ。昔感じた、重苦しい、沈みこむ感じがぬけていた。たぶん不安を感じることがなくなったためでもあろうか。プールの中ほどまで泳いで、彼は足をついてみた。そして広いプールの真ん中で、首を出している自分が、この上なく心地よかった。

プールから上がると、彼はコンクリートの上に大の字になって日光を浴びた。そして自分の細い腕を太陽にかざした。自分の裸の体が、彼は少年の頃から厭わしかった。頭の天辺から爪先まで、すべてが嫌いだった。小柄で、痩せ気味で、肌の青白いのを他の少年や、兄弟からからかわれると、彼は身を小さくして自分自身を呪った。しかし今、彼の裸体をののしる者たちは、すべてこの世から消えた。彼はおのれの身体でありながら、おのれのもののようには思われない、

おのれのあらゆる部分を不思議に思った。この腕は一体なんなのか、この足や、この腹部は。そして青年期から彼を悩ましてきた、この腹部の下にある異様なものは。見れば見るほど、それらは奇怪な、理解しがたい、不思議なものに思われた。自分の肉体がこれほどとらえがたいものであるとは。彼は目をつぶった。目蓋の下で太陽の赤い色が、鮮やかにいつまでも踊った。

体が乾くと、彼は衣服をつけて、再び歩き出した。公園であった大地の起伏に隠れて、一つの建物がひっそりとたたずんでいた。小・中学生の頃、何度か通った博物館であった。薄暗く口を開けた玄関ホールを覗くと、休館日のように思われた。中に入るとがらんとした空間には、思い出にある丸木舟は見られなかった。小学生の頃、いつもその横を通って、薄暗い廊下をつたっていった。目当ては小さな図書室であった。その部屋はいつも人がまれで、一人で本を見ていると、いつ気づいたのかスリッパの音がして、受付のおばさんが入ってきた。彼を見るといつもにこにこして、本を選ぶまでじっと待っていてくれるのだった。彼はこのおばさんに会いたくて、子供には難しい本を借り出したのだった。それは小学時代の終わりの夢のような思い出であった。本当にそのような、天使のようなおばさんがいたのか、今では確信がもてない。

その図書室がどこにあるのか、がらんとした広間をいくつか通りぬけて探したが、やはり夢の中のように、たった今あったものがもう見つからなくなっている、困惑が増すばかりであった。彼は夢遊病者のような気分で博物館であった建物を出た。日射しは傾きだしている。荒寥とした大地には、残されたコンクリートの建物の影が目立つようになった。ホテルなのであろうか、彼はその中の一つに入ってみた。ロビーらしいところに、エレベーターがあったが、扉が閉まったまま、動く気配はない。ボタンすらない。もはやこの世には電気を初めとした、あらゆる動力源が消滅しているのだ。階段をのぼって、いくつかの部屋を覗いてみた。すべて、ベッドもカーテンもない空き部屋であった。窓ですらまるごと消えていた。そのくりぬかれた四角い穴から外を眺めると、少し離れたところに広い窪みがあって、水がたたえられていた。彼はそのかつて池であったところに赴くため、廃屋を出た。

池はその大きさからして、かつて緑の木々に囲まれていた公園のボート池だった。北側を散策していると、向かいの岸辺の水に緑の影を映した木々の二重の像が、現とも幻ともつかぬ境地に誘った。その緑はもはや無い。池は火山湖のように、かざ波すら立てずに、ひっそりと水をたたえている。数少ない友人の一人に誘われて、ボートというものに初めて乗った時、彼はとまどって前後を逆に座っていた。友人は顔を真っ赤にして、反対だよと言った。どこがどう反対なのか分からなかったが、友人の剣幕に押されて座りなおした。そのことを自分ごとのように恥ずかしがった友人も、ボートももはや無い。この世界の消滅と共に、あらゆる記憶は浄化されていく。

彼は池の端の、日によって温まった土の上に腰をおろし、そのまま上半身を倒した。日影が傾くにつれ、青空にはメランコリックな翳りが生じた。白い半月が目に入った。昼間の空に浮かぶ白い天体を見て、小学生の彼は、それが金星であると思いこんでいた。科学画報で、金星は昼間でも見えると書いてあったからである。友達にも、真昼の空の白い影を指差して、あれは金星だよと教えた。その間違いには、宵の明星を見るまでは気づかなかった。あまりにあたり前なので、月が昼間も見えることを教えてくれる天文の本はないのである。友達にそうした嘘を教えた、

小さな傷も、もう忘れてよいだろう。

　彼は目蓋を閉じた。心地よい疲れが全身をひたしていった。そのまま彼は寝こんでしまった。仮眠にしては深い眠りだった。そして目覚めた時にも、それが何かの夢の続きなのか、実際の覚醒なのか、しばらくぼんやりとして判断がつかなかった。それというのも、一面に霧が立ちこめていたからだ。霧は池の面から立ち上るようだった。生温かさでそれが判った。日はすでに沈み、代わって半月が明るく照っていた。池の面にはその影が映っていた。その月影の周りには、かすかなさざ波がとり巻いていた。見ているうちに別の光が、池の面をいくつも蛍のようによぎりだした。何か光る生きものが池の中で乱舞しているように思われた。彼はふと気がついて夜空を見上げた。星座の間を数限りない流れ星が飛んでいた。いや、流れ星のように一瞬で消えることはなく、まさに夏の夜空の蛍のように、あるいは消え去ることのない花火のように、尾を引きながら乱舞する、数々の光の驟雨なのだった。彼は魅せられたように見上げていた。そしてそばに立っている人物がいることに、しばらく気がつかなかった。

　霧の中に不思議な老人が立っていた。彼はその姿を認めた時、すでにここで会う約束をしていたような気がして、少しも驚いていない自分をいぶかしがった。これが夢であるか、現実であるかは別として、同じ夢を二度見ているような気のする夢と違わない気がした。彼は立ち上がって、老人と向き合った。以前も同じようにこうして向き合った気がする。なんだか自分が二重の人生を生きていたような気がする。記憶にある表面の自分と、記憶の奥に隠されている別の次元の自分と。老人の顔を思い出そうとして、記憶の底を探っているうちに、ふと幼稚園の時に紫に光る甲虫をくれた、園長先生に似かよっている気がした。しかし仙人のような白髪と、長い顎鬚と、やはり仙人のような白いゆったりした衣裳は、別の世界のものであった。老人が先に口を開いた。

　「息子よ、長い苦しみは終わった。よく耐えてくれた。ご苦労であったな」

　老人が何を言いたいのか、彼には本能的に分かった。彼はごく自然に言葉が出た。

　「お父さん、やっと迎えに来てくれましたね」

　「これからは、この星はわれら平和な種族のものだ。誤謬（あやま）った生命はもはやない」

　「消してしまったのですか」

　「いや、別の宇宙へ移ってもらった。彼らに相応しい宇宙へ」

　　霧がひときわ深まった。光のシャワーはいよいよ数を増し、夜空一面が巨大な花火のようであった。そして霧の中から、もう二人の人物が現われてきた。一人は若い女で、一人は若い男だった。二人の若者は微笑みながら彼に歩み寄った。その衣服は、紫色をしていて、甲虫の羽のように、身にぴったりとまとわれていた。女の顔を見た時、彼の記憶の底から、幼稚園で彼をおんぶしてくれた少女が浮かんできた。

　「お久しぶり。また会ったわね」と彼女は懐かしげに言った。彼はちょっとはにかんで答えた。

　「よく僕を覚えていたね」

　「あなたは宇宙人であることが直ぐばれてしまったもの」

そう言って、彼女は可笑しそうに笑った。もう一人の若者が近寄ってきた。笑顔を見て、直ぐにカレーライスが思い浮かんだ。

「君だったか」今度は彼のほうから声をかけた。

「うん、小学校ではお世話になったね。君がいなかったら、僕も宇宙人であることがばれるところだった」

彼と二人の若者は、長い年月が昨日のことであったかのように、何のこだわりもなく親しむことが出来た。彼もそれを不思議に思う気持を失っていた。特にこれといった話をしなくても、向かい合っているだけで自然と笑みがこぼれてくるのだった。しばらくして、老人が皆に言った。

「さあ、息子たちよ。われらがこの星の、最初の光の祭典に参加しようではないか」

そして彼に向かって、

「お母さんも待っているよ」

そう言って、老人は彼に、昔のように紫色の甲虫の羽のような衣服を渡した。彼はその母親が誰であるか、訊くまでもなかった。彼が甲虫の衣服を身につけるのを待って、若者たちは紫の羽を広げた。あっという間に四つの光が天空に舞い上がった。

もはや生命のないこの星の上で、数限りない光の存在たちが、祝祭のダンスを果てしなく踊り続けた。

（「星と霧」完）